essay

「恵まれた大地」

その３　秋

田植えの後の記念撮影
泥だらけの勇姿

士別市上士別　農業

五十嵐　紀子

夏の喧騒がすぎさり、風が新しい空気をはこんでくる秋。

空はあくまでも澄み渡り、夜空は夏とは違う位置に星たちを散らし、夜露が日に日に冷たくなってきます。

今年こそは、全てが豊かな実りになるだろうと信じていたのに、台風一八号は、そんな農民の願いも聞き入れず、あちらこちらに傷跡を残していきました。

私が住むこの上川北部は、ふだんから風があまり吹かず、風に対しては無防備だったこともあるでしょうが、今回の台風は五〇年前の洞爺丸台風のようだと近所の老農が言っているように、めったにない、ものすごい威力の風台風だったのです。我家も、大小の被害がありました。

三〇年以上過ぎたドイツトウヒの林が半分近く根元や幹の途中で折れ、それはものすごい有様です。それまですくすくと伸びて大きくなった木が、一瞬にして魂が抜き取られたような姿になり、とても心が痛くなります。

いつも、私の気持ちを静め、新たなエネルギーが与えられた場所は、木々たちの痛みから発散される香りで満ちていました。

また、私たちが手作りした牛舎は、以前からあちらこちらが修理を必要としていたので、今回の台風で相当の被害がでるだろうと予測していたのに、軒先のトタンが五～六枚はがされた程度ですみました。

この地方の酪農家の中には、牛舎の屋根のトタンが一面はがされたり、壁がはがされ鉄骨

五十嵐　紀子（いがらし　のりこ）さん

仙台市生まれ
恵泉女学園短期大学　園芸生活学科卒
1977年　新規就農
夫　　広司　51歳
長男　直人　26歳
長女　恵　　23歳
二男　信人　20歳

現在75.2ヘクタールで酪農を中心とした立体農業を展開中。
栽培作物：缶詰用トウモロコシ・ビート・カボチャ
ジャガイモ・小豆・小果樹

放牧地の中にあるドイツトウヒの林

樹齢30年以上の木が倒れてしまいました

だけになったりと、かなりの被害をうけた方がたくさんいる中、本当に不幸中の幸いでした。すきまだらけだったのが幸いしたのでしょう。

それよりも、約二〇時間の停電が、あらためて電気のすごさ、ありがたさを感じさせてくれました。

農協が発電機を手配してくれたのですが、搾乳時間に間に合わず、夕方の搾乳は全部手搾りでした。久しぶりの手搾りに、牛たちの改良の変化をあらためて気づかされました。

まず、言うまでもなく乳量の違いです。昔（二五年程前）に比べ、搾っても搾っても乳が出るのです。そしてもう一つは、乳頭が短くなっており、手搾りには不向きな長さということでした。ミルカー対応として当然の変化なのでしょうが、自然からはどんどん遠ざかっているような不安にもかられた出来事でした。

小さな子も鎌を持ちます

刈り終わってバンザイ！

仲良く草とり

そんな台風が去った二日後、市民体験農園「きたごりんファーム」の稲刈りが始まりました。穂先が北に傾いだ米たちは、小さな手やきれいな華奢な手やゴツゴツした手で刈りとられ、ハサに掛けられました。

五月二〇日に植えられた小さな稲の苗は、六月中旬頃からの除草を経て、七月、八月の夏らしい暑さでしっかり頭をさげ、きれいな実をつけてくれました。

二〇アールの田んぼを二三区画に区切り、二三組の家族連れや職場の仲間たち、学童保育の子供たちが参加してくれました。

父親と中学生の息子さんが黙々と稲を刈っていたり、女子大生三人がまるでヒバリのようにおしゃべりしながら楽しそうに束ねていたり、小学生が競うように刈りとった稲束を運んだり、ふだん人けのない田んぼの中は、花が咲いたように色とりどりでにぎやかでした。

昨年、一昨年と冷害で、軽い稲束をかかえた者にとって、今年の稲は喜びの束でした。

過疎の進む田園に、ほんのひとときの人の集うこの場所は、とても光輝いていました。

十月初旬の脱穀には、「きたごりんファーム収穫祭」も開かれ、地元の農家の人たちと参加者との交流が、おいしい新米のたきたておにぎりと共に開かれます。

人と人とを結びつける一番簡単な方法が、おいしい食べ物であることを信じ、もっと多くの人たちが、それぞれの場所で交流の輪を広げていってほしいものです。